

自然保護と昆虫採集

東京農大育種学研究所 湯浅浩史

近年來、日本の豊かな自然の破壊は空前のスピードで進み、日本列島の野生生物はかつてない激激たる滅亡の危機に直面している。現存する生物はそれぞれ過去の地史を刻みこんで生きて「証人」であり、その存続の過程には幾多の試練、変遷を受けたであろうことは論をまかさない。しかし、いかに氷河期のような厳しい環境の訪れであろうとも、それは徐々にであり、多くの生物は従来の環境に似た地帯へ移動し得るが、新しい環境に生活を適応させる時間的余裕は十分あつたに違いない。ところで、有史來の人為的は自然の破壊の速さはどうであろうか、とてもその比でははない。それが、今後「日本列島改造」による全国的な規模で加速して拡がろうとしているのは全く憂うべき見通しと云わざるを得ない。更に、ここ指摘したいのは、それ以上に日本の自然を破壊し「悪」が存在するということである。林業である。国土緑化などの面でベールをかぶっているが、その表面をはがせば、これほどひどい自然破壊はない。戦後におけるチェーンソーと索道の利用はそれまでの林業を一変させた。昔はきりが一日がかりで切り倒れた大木でもわずかに分単位の時間で済む。しかも索道が結ばば道路が作れぬ場所でも木の運搬が可能である。この二者法により、むしろ深山は行く所なり、日本のおおべとの山がその「射程距離」に入ってしまった。そして、大規模な面における破壊が始まったのである。かく、奥西以西で最大のブナ林であつた扇の山がわずか数年で丸裸になつたのは悔

んでも悔みきれぬが、反面その明白な実証でもある。伐採量は植樹した木の成長量が追いつくはずはなく、更に、それにより悪い面は伐採後に針葉樹を植えることである。針葉樹林はヨーロッパやカナダやシベリアの例を引くまでもなく生物相は単調である。これに根から有害物質を分泌し下草となるべき植物や他の樹木の成長を阻害させるからである。植物が食弱な地に昆虫が豊富であろうはずがない。虫が少なければ鳥も少ない。獣も少ない。これに及しブナなどの落葉広葉樹林は北半球を特徴づける昆虫の群の最も多い場所である。これを皆伐して、針葉樹林にかえれば、どうして特色ある昆虫が残れようか、逃げこめる場所と絶対数さえあれば、生物はそう簡単に絶滅しない。繰返すか、平野部を除いて、かつての自然破壊は臭い。ところがそれが面に降り、しかもそのスピードがものすごく速い。安全地への逃避が間に合わない。さらに、かつての深山をひじめ逃避する場所がなくなってしまう。これと、一部が保護地として残されたとしても、蚕食されていくとすれば、集団が各地で孤立化し、他集団との交雑が不可能になる恐れが十分にある。ある哺乳類の試算では閉鎖集団では125頭以下になると、劣性有害遺伝子の集積により消滅は避けられないと言う。トキやコウノトリの例をみれば領けることである。しかも、哺乳類や鳥と異なり、ほとんどの昆虫は一年生であり、たとえば、100万匹の大集団であっても、90%不妊になると理論上は5年後に絶滅する。そのような不妊は致死に至らせる素材として、農薬、PCBをはじめ、種々の有害物質の蓄積は今更述べるまでもない。

このように自然の破壊と生物相への圧迫に対して、“虫屋”はどうか対処しているだろうか？ こういう事態に際して、虫屋のとりべき道やそのモラルは確立されているだろうか？ 残念ながら否と云わざるを得ない。趣味と言っては自我の収集欲、他人へのお世じらかしなどの欲望を満足させるための採集、その結果としてのコレクション。蝶やカミキリを何種集めたいという喜び、他人の採集品を珍品を一種でも多く手にしたい。そのために山の木を倒し、ドロボウ的に行方行為も平気である。さらに、最近では魚釣りなどと同じく、レジャー的になる向きも少なくなっている。“虫屋”などとは自嘲的に行方プライドを持ち、珍品ありに血眼になり、自我の欲を満足させることに熱中しているのか我々多くの現況ではあるだろうか。世論的には、虫屋が昆虫を勝手に殺すことは許さねばならない。大抵は自然の破壊が行われているのだから、ちが殺してもかまわない——ではむしろ通用しない。“なぜ虫を採集しに行かばい”この基本的な意義の第三者が聞いてはるほどと納得できる確立と心がたの急務である。自然の荒廃の現状を虫屋の手にまねいて傍観してははばきはばか、少くとも、自然の破壊に手をかしているという第三者の疑いの眼を、印象をぬぐうべく、各人がその意義をかかめ、虫を殺すべきである。

最近のプレートテクトニクスの発展は日本列島の地史を大に書きかえている。この屋台骨にあたるさまざまな仮説を固執するお世じり、お世じりに位み、長年の変動を身体に刻みこんだ生物をたいてはかきかき。人も含めて生物の進化は近年の遺伝子の花やかためざし、発達にもかかわらず、根本的に行方具体的な解析はすべきに断片的である。しかし、将来の解明の途

はすべての生物が自身に内在していることには疑いがない。従って、出来ることならば日本のすべての生物を最小限、現状のまま保ち、将来へ残してゆきたい。しかし、これがむしろ、不可能に近い状況ではめて、破壊を受け、消滅する以前に記録を残したい。生活史のタイプ生きた材料の記録が最も急を要する。しかし、普通の乾燥標本でも正確なデータがあれば、将来必ずさまざまな分野で利用されるであろうことは疑いもない。ノギリカミギリとニセノギリ、ルリクワガタとコルリクワガタのタイプは別、あるいは種命名からいって種群などでいってはいかなるべきか、それらが日本列島の起源や生物の進化に重大な影響をもつ種群であるかも知れない。さらに重要なことは全生物は決して静的ではないうち、微々ではあるが変遷しているという事実がある。この推移の標本を残してあげれば少なくとも形態上は記録できる。テントウムシの変遷の多化率の時間的勾配はその一例であるが、これは地理的勾配と結びつき、さらに、これにより地球の温暖化との相関が示唆される。ならば、どんなに小さな「変移」も看過しては行かない。兵庫県は瀬戸内海から日本海に亘る恵まれた自然を持つ。また、陸上生物の本州における地史的南下、北上は兵庫県を経ることは難しく、位置的に重要な意義のある地域である。過去数えきれない種群がここを往来し、その一部は現在もここに生きている。その中には過去の遺存種がまだ知られていない、一つとして息吹いているかも知れない。多くは意義がわからなくても、どんなデータでも必ず将来必要となる時がある。ルイスの時代に神戸で普通にみられた種のいかに多くが消滅したのか。

本誌の基本的なデータを収録する緑の下の持続的存在の小誌にぜひとも、兵庫の昆虫研究の中心的存在に発展することを、私共大いに期待する。